

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

7. 明治政府の学制改革に翻弄された安達峰一郎の学校生活

●司法省法学校に二位で合格

父から上京の許可を得た峰一郎は、明治17年の春に山辺を出発しました。師範学校の横川書記官(事務員)に伴われ、かつて問題になり、同15年6月に開通した関山新道(いわしおね)を通して宮城県に入り、塩釜から鰯舟に乗船し、13日かかって東京の神田猿楽町の下宿屋に着きました。

決心し鰯小船に塩釜より

東京指しての君の初旅
(鏡子歌集より)

峰一郎は、その下宿屋で入学試験の9月まで“精神一統何事不成”^{何ごとか成らざらん}の気概で猛勉強しました。そして司法省法学校の試験に臨み、受験者約1,500人というなか、最年少でしかも順位が2番というすばらしい成績で合格しました。

志願者は百にて数ふ驚かる

君は次席に赤沼氏に次ぐ

司法校へ年少の君

年長者と競いて秀づ此入試にて
(鏡子歌集より)

司法省法学校は、当時日本は急いで法治国家にしなければ欧米から相手にされないというので、明治政府は法律について優秀な人材を育成するため全国から応募者を募っていました。同年10月に75人が入学し、そのなかには山形師範学校の親友であった加藤幹雄(加藤紘一代議士の祖父)もいました。その他に、県内から浅見倫太郎と鑑悌蔵という人物も入学しています。

また、峰一郎と大学まで同じように進学し、成績も1、2番を競い合っ
て生涯の友となった若槻
禮次郎(大学卒業後、政
界に入り首相を2度も務
め、峰一郎の生家の石碑
に揮毫(筆で書くこと)
した人物)が同時に入学
しました。

司法省法学校は、予科4年、本科4年の学校でした。しかし、峰一郎が入学した年の12月に文部省に移管されて東京法学校となり、さらに翌18年



安達峰一郎生家の前にある、若槻禮次郎が揮毫した石碑

8月には東京大学予備門に、そして翌19年4月には予科3年、本科2年制の第一高等中学校と改称されました。(この中学校も峰一郎卒業後、“一高”として有名になった第一高等学校と改められました。)

●第一高等中学校(後の一高)へ進学

峰一郎が予備門のとき校長が代ると、寄宿舎規則を自由放任主義から一転して厳重な軍隊式の拘束主義に改正しました。これに対し、峰一郎らは新校長に強く抗議しましたが受け入れられなかったので寄宿舎を出て下宿しました。この下宿で机を並べて勉強した佐藤啓(西川町海味出身、東京専門学校卒、代議士)が、このときの峰一郎の気骨ある行動に感心して、昭和10年2月に開いた追悼会のとき思い出として語っています。

明治19年、峰一郎が予科(後の中学校)2年の6月に次のような漢詩を詠んでいます。

健身体養気力(身体ヲ健ヤカニシ気力ヲ養イ)
究学理沈重計画(学理沈重ノ計画ヲ究メ)
以竭愛国之誠(以テ愛国ノ誠ヲ竭サン)

諏東小史

この漢詩を要約すると、まず健康が第一で、その上で研究を進め、そして国のために尽くすことが本分であると、自分の決意を詠んでいます。短い言葉で自分の考えを端的に表現しており、さすがです。また、“諏東小史”とは諏訪山の東に生まれた者ということだと思われま。ほかに、羽州(出羽国)の南の学人という意味を込めた“羽南学人”というペンネームも使っています。このように故郷の地名をペンネームにしてよく使っていて、峰一郎の故郷への思いの強さがうかがえます。

予科時代の講義はすべてフランス語であったそうです。峰一郎は以前からフランス法を学んでいたため、習得にはさらに力を注いでいました。その能力は、西洋の物語を日本語に翻訳して、新聞や雑誌に発表するまでになっていて、昭和15年に太宰治が『走れメロス』として発行した短編小説を、すでに明治22年、本科(後の第一高等学校)2年のときに翻訳し、新聞に掲載しているほどでした。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄

参考図書：後藤嘉一著『やまがた史上の人物』郁文堂書店 昭和40年刊